

## 二つの民族集団間の境界線と都市空間における表象

—北アイルランドの地域メディアと学校教育に注目して—

九州大学 学術研究・産学官連携本部 福井令恵

### 1 目的

これまで私は長年対立関係にある北アイルランドの二つの住民集団が描く、都市空間にあらわれる視覚イメージに注目し、集合意識がどのように共有されるのか、住民集団間の境界線はどのように引かれるのかについて研究してきた。

こうした調査のなかで、歴史を題材にした壁画の表象において、プロテスタント系とカトリック系の住民集団は、別々の歴史的出来事を占有的にとりあげていることが明らかになった。同じ場所に住んできた住民集団は、二つの別々の歴史を記念・顕彰するのである。

同じ場所に住みながら、なぜ二つの歴史が存在するのか。本研究では、理由のひとつとして、学校の歴史教育の影響があるのではないかと考え、学校教育において人々はどのように歴史を学ぶのかを検討する。

特に、学校での学習用図書に掲載される挿絵・写真は、壁画で描かれるイメージと関係があるのかどうかを調査する。さらにそれを壁画の存在する場所と合わせて考察することで、フォーマルな教育、インフォーマルなメディア、都市空間の三点が交差する場での、二つの住民集団の集合意識の形成のあり方を考え、長期紛争後、住民集団間の分断状況が残る北アイルランド社会において、人びとの集合的意識がどのように形成されるかを、地域での視覚イメージの流通に注目し、明らかにする。

### 2 方法

教育委員会や教育大学の教員などの関係者の聞き取りをもとに、現在学校現場において利用されている可能性の高い本を蒐集し、掲載されている挿絵や写真等を調査した。ナショナル・カリキュラムや全国試験についても制度や内容を調べた。壁画については、これまで行ってきた定点調査のデータを更新した。

### 3 結果

学校制度や歴史関連科目のカリキュラム、教材として使用される書籍に関して、カトリック系とプロテスタント系の学校に大きな違いはない。しかし、教育関係者へのインタビューからは、カトリック系の学校とプロテスタント系の学校で、どの歴史的出来事を重点的にとりあげるのか、どのようにとりあげるのかという点に差がある可能性が高いことが示された。

教材として使用される書籍に掲載される写真や挿絵・ポスターなどのイメージは多様であるが、一部は、壁画にも採用され、地域の住民にとってなじみのある地域の歴史を示す代表的なイメージになっている。別々の題材—それぞれが自分たちの歴史として重要だと考える出来事—を、書籍に掲載されたイメージを利用しながら、壁画でも再現するように描くのである。

またそうしたイメージを描いた壁画が存在する、都市空間の具体的な場所を分析した結果、それらのほとんどが地域の幹線道路沿いの人や車の往来の多い場所などに描かれており、住民が頻繁に目にすることの多い場所であることが確認できた。

ここから、地域で特定の歴史が自分たちの歴史としてなじみのあるものとして定着する仕組みの一端を明らかにできた。

### [付記]

\*本研究は科研費・基盤研究(C)「北アイルランドのミューラルにみるイメージの共同体—学校教育と地域メディアの関係—」の補助を受けています。